

あほう鳥の鳴く日

小川未明

青空文庫

若者は、小さいときから、両親のもとを離れました。そして諸所を流れ歩いていろいろな生活を送っていました。もはや、幾年も自分の生まれた故郷へは帰りませんでした。たとえ、それを思い出して、なつかしいと思っても、ただ生活のまにまに、その日その日を送らなければならなかったのであります。

もう、十七、八になりましたときに、彼は、ある南方の工場で働いていました。しかし、だれでもいつも健康で気持ちよく、暮らされるものではありません。この若者も病氣にかかりました。

病氣にかかつて、いままでのように、よく働けなくなると、工場では、この若者に、金を払って雇っておくことを心よく思いませんでした。そしてとうとうある日のこと、若者に暇をやつて工場から出してしまったのです。

べつに、頼るところのない若者は、やはり自ら、勤める口を探さなければなりません。でした。

彼は、それからというものは毎日、あてもなく、あちらの町こちらの町とさまよつて、職を求めて歩いていました。

空そらの色いろのうす紅あかい、晩方ばんがたのことでありました。彼かれは、疲つかれた足あしをひきずりながら、町まちの中なかを歩あるいてきますと、あちらに人ひとがたかっています。

何事なにごとがあるのだろうか？　と思おもつて、若者わかものはその人ひとだからのしているそばにいつてみますと、汚きたならしい少年しょうねんをみんながとりかこんでいるのであります。

「さあ、赤あかい鳥とりを呼よんでみせろ。」と、一人ひとりがいいますと、また、あちらから、

「さあ、白しろい鳥とりを呼よんでみせろ！」とどなりました。
汚きたならしいふうをした子供こどもは黙だまつて立たっていました。

「どんな鳥とりでも呼よんでみせるなんて、おまえは、うそをつくのだろうか？　なんで、そんなことがおまえにできてたまるものか！」と、人々ひとびとは口々くちぐちにいつて冷笑あざわらいました。

すると髪かみの毛けの伸のびた、顔色かおいろの黒くろい、目めの落おちくぼんだ子供こどもは、じろじろとみんなの顔かおを見みまわしました。

「私わたしは、けつして、うそをつきません。山やまにいて、いろいろほかの人間にんげんのできないことを修業しゆぎようしました。ほんとうに、みなさんが赤あかい鳥とりが呼よんでほしいならば、どうか、私わたしに、今夜泊こんやとまるだけの金かねをください。私わたしは、すぐ呼よんでみせましょう。」といいました。
群衆ぐんしゆうの中なかには、酒さけに酔よつた男おとこがいました。

「ああ、呼んでみせろ！ もし、おまえが呼んでみせたら、いくらでも、ほしいほどの金をやるから。」といいました。

子供は、うなずいて、空を仰ぎました。雲はちぎれちぎれに高らかに飛んでいました。そして、日がまったく暮れてしまうのには、まだ間があつたのです。

たちまち、鋭い口笛のひびきが子供の唇から起こりました。子供は、指を曲げてそれを口にあてると、息のつづくかぎり、吹きならしたのであります。

このとき、紅みがかつた、西の空のあなたから、一点の黒い小さな影が雲をかすめて見えましました。やがて、その黒い点は、だんだん大きくなって、みんなの頭の上の空に飛んできたのです。そして、あちらの町の建物の屋根に止まりました。

それは、夕暮れ方の太陽の光に照らされて、いつそう鮮かに赤い毛色の見える、赤い鳥でありました。

「さあ、このように赤い鳥が飛んでまいりました。」と、子供はいいました。

「あんな遠くでは、赤い鳥だかなんだかわからない。もつと近く、あの鳥を呼んでみせろ！」と、酒に酔った男が叫びました。

子供は、ふたたび高らかに、口笛を吹き鳴らしました。すると、赤い鳥は、すぐみん

頭のうえの電信柱にきて止まりました。

「おい、あの鳥を手に捕まえてみせろ。」と、このとき、見ていた一人がいました。

「私には、あの鳥を捕まえることもできませんが、今日はそんなことをいたしません。」と、子供は答えました。

「なんで、おまえは捕まえてみせないのだ？」

「私は、ただ赤い鳥をここへ呼んだばかりです。」

「捕まえてみせなければ、金をやらないぞ。」と、群衆は口々に叫びました。

「赤い鳥を呼んでみせろというだけの約束であつたのです」と、子供は答えました。け

れどみんなは、口々に勝手なことを喚いて、承知をしませんでした。

「手に捕まえてみせなけりや、金をやらない。」と、酒に酔った男もいいました。

「私は、お金はいりません。そのかわり、今夜この町へ、黒い鳥をたくさん呼んでみせま

しよう。」と、子供はいいました。

黒い鳥という言葉は、なにか不吉なことのように、みんなの耳に聞かれたのです。けれ

ど、だれも心から、ほんとうに信ずるものはありませんでした。なんでおまえにそんなこ

とができるものか？ この赤い鳥の飛んできたのは、偶然だったろうといわぬばかりの

顔つきをして、この汚らしい子供の姿を見守っていました。

そのとき、だれか、小石を拾つて、電信柱の頂に止まっている赤い鳥を目がけて、投げました。赤い鳥は驚いて、雲をかすめて、ふたたび夕空を先刻きた方へと、飛んでいつてしまいました。

子供は、しよんぼりとそこを立ち去りました。この哀れな有り様を見た若者は、群衆を憎らしく思いました。自分も困っていたのですけれど、まだわずかばかりの金を持つていましたので、その金の中から幾分かを、子供に恵んでやりました。子供は、たいそう喜んで幾たびも礼をいいました。そして、忘れまいとするように、じつと若者の顔を見上げていました。

その晩のことであります。空はいい月夜で、町の上を明るく昼間のように照らしていました。どこからともなく、口笛の音が起こりますとたちまちの間に、黒い鳥が、たくさん月をかすめて、四方から飛んできて、町の家々の屋根に止まりました。

町の人たちは、みんな外に出て、この黒い鳥をながめました。そして、こんな鳥が、どこから飛んできたのだろうと怪しみました。

しかし、今日の暮れ方、町で、あの汚らしいふうをした、髪の毛のびた子供が、みんな

なからからかわれていた有り様を見た人たちは、あの子供がだまされたために、復讐をしたのだらうということを知りました。なんという名の鳥か、だれも、この黒い鳥を知っているものがありませんでした。その鳥は、からすよりか、形が小さかったのであります。その鳥は、黙っていました。そのうちに、また、一羽残らず夜のうちに、どこへか飛んでいってしまいました。町の人たちは、なにか悪いことがなければいいかと、おそれていました。

「あの汚らしいふうをした乞食の子は、悪魔の子だ。見つけしだいにひどいめにあわせて、この町の中から追い払ってしまえばいい。」と、ある人々はいっていました。

数日後のこと、若者は、雇われ口を探しながら歩いていきますと、先日汚らしいふうをした子供が、職人体の男にいじめられているのを見ました。

「おまえは、どこから、この町へなどやってきたのだ。このごろは町にろくなことがない。火事があったり、方々でものを盗まれたりする。なんでも、口笛を吹く子供があやしいといううわさだが、おまえは口笛を吹くか？ はやく、どこかへいってしまえ。」と、男は子供をにらみつけて、胸のあたりを突いて、あちらへ押しやっています。

子供は、黙って、うつむいていました。これを見た若者はそばへやってきました。

「かわいそうなことをするものでありません。この子供は、あなたに悪いことをしましたか？ 口笛を吹くということが、どうして悪いのですか？」と、若者は、職人体の男をなじりました。

職人体の男は、振り向いて、

「この子は、悪魔の子です。この子供が町にはいつてからというもの、ろくなことがない。」といいました。

「そんな理由のあるはずがありません。私は、それを信ずることができません。」と、若者はいいました。

職人体の男は、返す言葉がなく、あちらにいつてしまいました。

まもなく、五、六人連れの乱暴者がやってきました。そして、いきなり、汚らしいふうをした哀れな子供をなぐりつけました。

「おまえだろう、口笛を吹いて、夜中に、黒い鳥を呼んだりするのは？ 火をつけたのも、おまえにちがいない。また、方々へ泥棒にはいつたのも、おまえにちがいない。」と、彼らは口々にののしりました。

このとき、子供は、なんといつて弁解をしても、彼らはききいれませんでした。そし

て、つづけざまに子供をなぐりつけました。これを見た若者は、あまりのことに思つて、

「なぐらなくてもいいでしょう。口笛を吹いて、鳥を呼んだことと、火事や、泥棒とが、なんの關係があるのですか？ おおぜいで、こんな子供をいじめなんてまちがつてはいませんか。」と、若者は、彼らの乱暴を止めようとしていいました。

彼らは、これを聞くと、かえつてますます怒りました。

「なにもおまえの知つたことじゃない。おまえは、この小さい悪い奴の仲間なのか？ 生意気な奴だからいっしょになぐつてしまえ！」といつて、彼らは、若者の手や、足や、顔や、頭を、かまわず思うぞんぶんになぐりつけました。

若者の鼻からは、血が流れました。そして、子供と若者の二人は、これらの乱暴者から、ひどいめにあわされました。彼らは、思うぞんぶん二人をなぐると、

「さあ、さつさと早くこの町から、どこへでもいつてしまえ。まごまごしていると、また見つけて、こんどは許しておかないから。」といい残して、これらの乱暴者は去つてしまいました。

子供は、若者に二度助けられましたので、どんなにか、ありがたく感じたかしれませ

ん。若者が、自分を助けるために、鼻から血を出したことを知ると、ただすまなく思つて、幾たびも礼を申しました。

「そんなに、お礼をいわれると困ります。私は、良心が、不正を許さないために、戦いましたばかりです。」と、若者は答えました。

二人は、とぼとぼと話しながら、町を出はずれて、あちらに歩いていきました。

「これから、あなたは、どこへおゆきなさいですか。」と、子供は、若者にたずねました。

「私はいままで、ある工場で働いていましたが、病気になったために、その工場から出されました。そして行き場がなく、毎日雇われ口を探しているのです。」と、若者は答えました。

すると、子供は、

「私は、山にいたとき、口笛を吹いて、いろいろな珍しい鳥を、捕まえることを覚えました。その珍しい鳥の一羽を持ってあちらのにぎやかな港にいつて、金のある人たちに売れば、困らずに暮らしてゆくことができます。しかし、鳥をほんとうにかわいがる人は少ないのです。鳥がかわいそうでなりませんから、鳥を捕って売ることはいいたしません。

わたしは、独りでさびしいときには、いままで、いろいろな鳥を呼んで、その声をきくことを楽しみにしました。また、私は、これから西にゆきますと、広がりんご畑があつて、そこでは人手のいることを知っています。そのりんご畑の持ち主を、私は、まんざら知らないことはありません、その主人に、私は、あなたを紹介しましょう。そして、私も、あなたといっしょに働いてもいいと思います。これから、二人は、そこへいつて働こうじやありませんか。」といいました。

若者は、これをきいて、たいそう喜びました。そして、二人は、西の方にあるりんご畑をさして旅をいたしました。

二人は、りんご樹の手入れをしたり、栽培をしたりして、そこでしばらくいっしょに暮らすことになりました。二人のほかにも、いろいろな人が雇われていました。若者は、金や、銀に、象眼をする術や、また陶器や、いろいろな木箱に、樹木や、人間の姿を焼き付ける術を習いました。

りんご畑には、朝晩、鳥がやつてきました。子供は、よく口笛を吹いて、いろいろな鳥を集めました。そして、鳥の性質について若者に教えましたから、若者は、人間や、自然を彫刻したり、また焼き画に描いたりしましたが、鳥の姿をいちばんよ

く技術ぎじゆつに現あらわすことができたのであります。

しかし、二人ふたりは、幾年いくねんかの後のちに、また別わかれなければなりません。子供こどもは、青せいね年ねんになりました。そして、若者わかものも年としをとりましたから、二人ふたりは、もつと広い世よの中なかに出でていつて、思おもった仕事しごとをしなければならなかつたからです。

「私わたしは、汚きたならしいふうをして、町まちの中なかをうろついていたときに、あなたに助たすけられました。あなたは、自分じぶんの身みを忘わすれて、私わたしを救すくってくださいました。」と、その時じぶん分子こどもであつた青せいねん年ねんはいいました。

「ほんとうに、もう思おもい出だせば幾いくねん年ねんか前まえのことでありませぬ。私わたしは、病びよう氣きをして職しよを失なつているときに、あなたにあつて、このりんご圃ぼたけへつれられてきました。そして、ここで幾いくねん年ねんか月つき日を過すぎました。私わたしは、ここにきたがためにいろいろの技ぎ術じゆつを覚おぼえることができました。これから、また方ほう々ぼうを渡わたつて、もつといろいろのことを知しつたり、見みたいと思おもいます。」と、当時とうじの若わか者ものは、もういい働はたらき盛さかりになつていて、こゝろ答こたえました。

「おたがいに、この世よの中なかから、美うつくしい、喜よろこばしいことを知しりませぬ。私わたしは、あなたが、私わたしのために乱らん暴ぼう者ものからなぐられて、血ちを流ながされたことを一いつ生しやう忘わすれませぬ。」

「いえ、いつかも、いいましたように、けつしてあなたのためではありませぬ。たとえそ

の人があなたでなくても、だれであつても、弱いものを、ああして乱暴者がいじめていましたら、私は、良心から、命を投げ出して戦つたでしょう。」と、昔の若者はいました。

「みんなが、そのような、正しい考えを持つていましたら、どんなにこの世の中がいいでしょう？ 私、この話をみんなに知らしたいと思ひます。私は、珍しい鳥をあなたにあげますから、いつまでも飼つてやつてください。そして、私を忘れずにいてください。」と、昔の子供はいいました。

口笛を上手に吹く彼は、山の方へはいつていきました。そして、どこからか、一羽の珍しい鳥を捕まえてきました。

「なんとという鳥ですか。」と、年上の若者がきくと、

「どうか、あほう鳥という名をつけておいてください。この鳥をあなたにさしあげます。」と、年若の子供は答えた。

二人は、ついに南と北に別れました。

それから、幾十年……たつたことでしょう。ある町の二階を借りて、年とつた男が、鳥と二人でさびしい生活をしていました。

男は頭の髪が半分白くなりました。鳥も年をとってしまいました。男は、鳥の焼き画を描くことや、象眼をすることが上手でありました。終日、二階の間で仕事をしています。その仕事場の台の前に、一羽の翼の長い鳥がじつとして立っています。ちょうど、それは鋳物で造られた鳥か、また、剥製のように見られたのでありました。男は、夜おそくまで、障子を開け放して、ランプの下で仕事をすることもありました。夏になると、いつも障子が開けてありましたから、外を歩く人は、この室の一部を見上げることもできました。

ちやうど隣の家の二階には、中学校へ、教えに出る博物の教師が借りていました。博物の教師は、よく円形な眼鏡をかけて、顔を出してこちらをのぞくのであります。

博物の教師は、あごにひげをはやしている、きわめて気軽な人でありましたが、いつも剥製の鳥を、なんだろう？ ついぞ見たことのない鳥だが、と思っていました。男が、気むずかしい顔をして仕事をしているので、つい口を出さずにいりましたが、ある日のこと、教師は、

「あれは、なんとという鳥の剥製ですか？」と、唐突にききました。

下を向いて仕事をしていた男は、隣の屋根から、こちらを向いて、みような男が顔を出してものをいったので、気むずかしい顔を上げてみましたが、急に笑顔になって、

「やあ、お隣の先生ですか。さあ、どうぞ、そこからお入りください。」と、男はいいました。

男は、その人が、学校の先生であるのを、前からものこそいわなかったけれど、知っていたのです。

「なんとという鳥ですか？ 珍しい鳥ですな。」と、先生は、はいろうともせずにはたずねたのであります。

「あほう鳥といえます。」と、男は答えました。

「あほう鳥？」といつて、先生は、聞いたことのない名なので、びっくりしたように目を丸くしました。

「なんにしてもいい剥製ですな。」と、先生は、ため息をもらしました。

「いや、剥製ではありません。生きています。もう年をとったので、いつもこうして眠っています。」と、男は答えました。

先生は、不思議なことが、あればあるものだと、ふたたび、びっくりしました。この

先生もどちらかといえ、あまり人と交際をしない変人でありましたが、こんなことから、隣の男と話をしようになりました。

ある朝、あほう鳥が鳴きました。男は、なにかあるな？と胸に思いました。

はたして、隣の先生がやってきました。そして、大事に扱うから、ちよつとあほう鳥を学校へ貸してくれないかと頼みました。男は、あほう鳥をひとり手放すのを氣遣つて、自分も学校まで先生といっしょについていきました。

こんなことから、男は、多数の生徒らに向かつて、昔、南のある町を歩いているときに、子供を助けたこと、それから、その子供といっしょに働いたこと、子供は、どんな鳥でも自分の友だちにすることができたこと、この鳥は、その青年が分れるときにくれて、いまままで長い月日の間を、この鳥と自分は、いっしょに生活をしてきたことなどを、物語ったのであります。

それから、正直な「鳥の老人」として、この町の付近には評判されました。この人の、鳥の焼き画や象眼は、急に、名人の技術だとうわさされるにいたりました。

暗い、夜のことであります。この年とつた男は、ランプの下で仕事をしていきますと、急

にじつとしていたあほう鳥が羽ばたきをして、奇妙な声をたてて、室の中をかけまわりました。いままでこんなことはなかったのです。

「おまえは、気でも狂ったのではないか！」と、男は、鳥に向かつていいました。けれど、鳥は、なかなかおちつくようすはありませんでした。

「先生に、きてみてもらおう。」と、男は、もうこのごろでは、親しくなった、隣の先生を呼んだのでありました。

「鳥は、ものを感じやすいというから、今夜、変わったことがあるのかも知れない。あるいは地震でもな……気をつけましょう。」と、先生は、しきりに騒ぐ鳥を見ながらいいました。

はたして、その夜、この町に大火が起りました。そして、ほとんど、町の大半は全滅して、また負傷した人がたくさんありました。

この騒ぎに、あほう鳥の行方が、わからなくなりました。男はどんなにか、そのことを悲しんだでしょう。彼は、焼け跡に立って、終日、あほう鳥の帰ってくるのを待っていました。しかし、とうとう、鳥は帰ってきませんでした。煙に巻かれて、焼け死んだものか、南の故郷に、逃げていったものか、いずれかであればなりません。

「わたしは、べつに、この町まちにいなければならない身みではないのです。もう一度ど、鳥とりのすんでいた国くににいつてみようと思おもいます。」と、男おとこは、先生せんせいにいいました。

「そうですか、そんなら、私わたしも、あなたといっしょにいって、その口笛くちぶえの名人めいじんについて、珍しい鳥とりの研けん究きゆうをいたします。」と、先生せんせいがいいました。

こうして、男おとこと先生せんせいは、旅たびに出でかけました。遠とほくの空そらに、白しろい雲くもが漂ただよっていました。三人さんにんが落おち合あった日ひ、どんな話はなしを、たがいに睦むつまじく語かたり合あうでありますよう。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年9月

※表題は底本では、「あほう鳥《どり》の鳴《な》く日《ひ》」となっています。

※初出時の表題は「阿呆鳥の鳴く日」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

あほう鳥の鳴く日

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>